

2024年7月の総評に代えて

○林 桂○

●まちりこ●(埼玉県 49歳)

追われても
追われなくても来る明日
伸びた分だけ
爪を切る夜

【評】一行目二行目は、よくある感覚だろう。しかし、それに付ける「伸びた分だけ／爪を切る夜」は、それをどのように受けて生きるかが深掘りされたものだろう。

●さいう●(石川県 19歳)

せみとりに
向かう
背すじのりんとして
五さいになったおとうとは風

【評】「班田収授法」では、男女六歳から口分田を与えられ耕作民となった。現在ではとんでもない感覚だが、六歳は小さな大人だったのである。数え年の六歳は、現在の五歳。五歳にして「背すじのりんとして」「風」の如き佇

まいの弟の中に、大人の萌芽を感じているのには一理あるかもしれない。

●歪いう子●(佐賀県 40歳)

露の世を生きて感想でしかない

【評】「露の世」は儚いこの世の喩え。しかし、その儚いこの世を生きながら、私たちはそれを「感想」のレベルしか言い得ない存在でもある。

●こはくいろ●(大阪府 19歳)

わたしの底が
抜け落ちないように
本を読む

【評】「わたしの底が／抜け落ち」という感覚。それを支える読書という行為。自身を支えるものは何か。案外読書は正解かもしれない。

●日下部 友奏●(群馬県 18歳)

洗濯のまっただなかにある裸足

【評】洗濯をするとき、私たちの大方は裸足になっているだろう。しかし、そのことを大切なこととして意識することはない。ここでそれを意識化したことで見えてくるものがあるだろう。

● azusa ● (京都府 23 歳)

水蜜桃ほどの透明感で泳ぐ

【評】「磧にて白桃むけば水過ぎゆく」(森澄雄)を踏まえるか。「水蜜桃」が透明感を持つことはない。しかし、言葉の「水蜜桃」には、透明感が感じられる。

● 羽水 繭 ● (大阪府 44 歳)

いもうとになったことしかない
星は風が吹いてもゆれたりしない

【評】「いもうと」に生まれれば生涯妹である。運命とか宿命とかいうと大きなものを思い浮かべるが、これもそうである。こんな関係に雁字搦めにされながら生まれてきているともいえる。星が瞬くのは、大気の揺らぎであり、星そのものの表現ではない。一行目の喩表現なのであろうか。

●常田 瑛子●(山口県 37 歳)

子ウサギの役が抜け切れない夜の
—オクターブ高い「おやすみ」

【評】「演じる」という意識は、自身の表現と自身を借りた他者性の表現の切り分けである。しかし、幼い、多分保育園児か幼稚園児が、子ウサギを演じたときに、この切り分けはうまく行えないのだろう。夜になっても、子ウサギはなかなか去ってはくれないのだ。

●洋梨 またら●(群馬県 16 歳)

あだちたろうより伝言
損失は
気にしないごとに大きくなる

【評】「あだちたろう」は「安達太郎」だろう。夏の入道雲のこと。一人で過ごす夏休み期のつばやきのように見える。日々の小さな葛藤のなかに生きているようだ。

●お寺●(愛媛県 26 歳)

何もかも上手くいかずに
泣きながら焼いたハンバーグが
母の味

【評】傷心の中で焼いたハンバーグが、思わず母が焼いてくれた味になっていたという。そこで気がついたのは、母も同じような感情の中で、焼いてくれていたのではないかということである。過ぎ去った母の感情に邂逅した思いなのだろう。

●荒谷 玄●(京都府 20歳)

この街を抜け出すための
予備校の照明が星たちをかき消す

【評】夜学の予備校だろう。灯火は煌々と輝き、空の星をかき消している。「この街を抜け出すため」が、効いている。大学などの進学が第一目的ではなく、ふるさと脱出が第一の目的なのである。青春期にはある感情だ。

●小里京子●(北海道 31歳)

去年今年伸びるキリンの首湿る

【評】「去年今年貫く棒の如きもの」(高浜虚子)のパロディだろうか。虚子の快作というこの句の「棒」の提示するイメージには、様々な解釈がされている。しかし、それをキリンの首のようだと解釈した人を知らない。「生」の湿

り気をもって伸びている棒のごとき首。これも快作だろう。

●さほ●(神奈川県 21歳)

亀を連れ実家に帰る外房線

【評】実家は外房線のいずれかの駅にある。実家を離れて一人暮らす。亀はペットとして飼っているのだろう。ペットの亀と暮らす生活が、この帰省の裏にはりついている。

●福山ろか●(埼玉県 19歳)

私だけ躑躅を吸ったことがない

【評】幼いときに、ツツジの花の蜜を吸って遊んだ経験を持つ人は多いだろう。あるとき、仲間でその話に及んだときに、「私」だけその経験がないことが分かる。それだけのことだが、幼い遊びの環境の違いを反映しているのは間違いない。

●塩見 侘●(沖縄県 45歳)

妹に似たパプリカをもてあます

【評】「妹に似たパプリカ」の面白さ。持てあましている意味で妹と同じなのであろう。兄妹の関係がほの見える。

●木下 香苗●(滋賀県 48 歳)

祖母の家
木彫りのゾウもつつがなく

【評】「祖母の家」なので、祖父が亡くなり、祖母は一人暮らしなのであろう。「木彫りのゾウ」は、祖母の家を飾る最も特徴的な置物なのだろう。祖母が旅の思い出として買い求めたものか、あるいは「わたし」が旅のお土産としてプレゼントしたものか。ともかく、祖母の家を飾って久しくなるものだろう。その木彫りは以前と変わった様子もなく飾られている。「も」なので、祖母にも変わりない。「木彫りのゾウ」を描いて、祖母の安寧を描く。

●絵巻●(東京都 62 歳)

ビール注ぐ
つばさのひらく音 たてて

【評】ビールを注ぐ音を、「つばさのひらく音」に見立てる。開放感、爽快感を乗せている。

●太陽と月●(愛媛県 47歳)

「来年は旅行に行きな」
と緩和病棟の君は言う

【評】緩和病棟に入院の「君」の感謝の言葉が「来年は旅行に行きな」。看病のために長く付き添ってきた「わたし」へのおもんばかりである。来年になれば「君」の死をもって看病も終わるに違いないのだ。悲しい前提の感謝である。

●飯島英作●(東京都 18歳)

雨影に沈む港町
寂れた商店街
古びた舟
源平の侘しい話
雨色に染まっていく私

【評】感情的な言葉を抑えて、自分の立つ佇まいを描く。この欄では数少ない手法。一行目「雨影」と五行目「雨色」が呼応して完結的な像を結ぶ。源平の合戦の伝わる寂れた港町の雨の侘しさ。